

Title	新館建設について思うこと
Author(s)	松田, 榮博
Citation	静脩 (1999), 臨時増刊号(1999)100周年記念: 18-19
Issue Date	1999-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/37848
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

新館建設について思うこと

松田 榮博

新しい図書館の建設に携った一人として、本部キャンパスの建築群の中であって、ひととき堂々たる風格の図書館を見るにつけ、さまざまな思いが甦る。

この図書館建設について特筆すべきことは実に多い。そのうちの一つは、林館長時代の運営改善に関する委員会、施設・サービス委員会における「新営計画」の策定過程において、また、同計画に基づく具体的な実施計画を検討するにあたって、多くの館員が参画し、ライブラリアンとしての知恵や意見が大きく反映されていることである。

限られた敷地の中で、与えられた資格面積を有効に活かし、しかも、今後の図書館活動のあり方・すすめ方等を勘案して具体的にどのようなものにするか、「新営計画」の策定には長期間を要している。私は図書館の全面建替えが認められ、図書館商議会が「新営計画」を確定した直後の昭和56年4月に附属図書館にお世話になり、建築計画の検討に参加したが、図書館業務との関係、構造上・技術上の問題、建築費とのかかわりなどを含め、全体の問題を調整して「一つの図書館」にまとめることには、たいへん難しいものがあることを知った。館内の意見の聞き役であり、施設部との打ち合わせに当たった私にとっては、ご専門の立場で種々ご検討をいただき適切なアドバイスをいただいた施設部の方々のご好意が忘れられない。その後施設部によって「建築計画」が確定され、富家建築事務所により仕上げられた詳細設計をもとに戸田建設株式会社が昭和56年12月に着工、昭和58年10月20日待望の図書館が完工したが、当時の館員の叡智が随所に込められた「名建築」であると私はひそかに思っている。

なお、当初「現地建替え反対」の動きが館内外にあった。建替え期間中のサービスの低下は許されないのご主張は貴重であるが、一方、現存する図書館を残し、別の地に新しい図書館

を建てることにすれば資格面積が少なくなること、大学の発展のために、情報化時代にふさわしい豊かな機能をもった図書館をつくる必要があることなどを話し合い、ご理解いただくところとなった。管理的立場にある者の説明責任（accountability）の大切さを痛感するとともに、このことにより、全館挙げて図書館建設並びに移転期間中の業務を恙なく遂行していくには、新館建設について透明度のある枠組みや方向性を示すことが重要であると考えた。将来の図書館活動に備え、利用者にとっては勿論のこと、館員にとってもすばらしい図書館をつくることへの共通の理解と認識あるいは暗黙の了解があってこそ、全館員が汗して取り組むことができたのではないかと思っている。

今にして思えば、学内各所への事務室・閲覧室・蔵書50万冊の移転は実に大変な作業であった。移転先での業務の遂行は不便であり困難をきわめたとし、利用者各位には多大のご迷惑をおかけした。旧館取り壊しにつぐ新館建設の着工から竣工・館内設備の整備に至るまでの間、さまざまな問題への対応に明け暮れたが、やり甲斐のある日々でもあった。かくして建物面積が約3倍に増大し、内容を一新した新館への再移転、1日も早くと思う心ばかりがやはり過酷な労働となったが、屋上からみた四周の景観は、これまでの疲れを癒してくれるすばらしいパノラマであった。昭和58年10月29日の竣工披露、そして昭和59年3月21日の開館記念式の挙行と事は運んだ。すべてが日常業務をこなしながらの大仕事であった。

ここで建設事業にかかる経費面に言及しておきたい。二度にわたる「移転費」の確保には若干の工夫が必要であった。「建物新営特別設備費」については、「世界各国の方々に見ていただくことになるので立派なものにしてほしい」と、ほぼ要求どおりの予算を認めていただいた。経理部の方々の図書館づくりへの思いに熱いものを感じ、

閲覧機の一つを選ぶのにも心を砕き、館員の意見を取り入れながら館内外の整備に努めた。

次に「図書館運営費」の確保は、新しい図書館の命運にかかわる重大事であった。建物規模の拡大と設備の充実、さらに図書館の果たすべき諸機能の整備充実に伴い、従来にない図書館活動が展開されるので、それに見合った多額の運営費を必要とすることは必定である。高村館長ご就任直後の昭和57年4月からこの問題に取組み、昭和58年4月開催の京都大学評議会が昭和58年度の歳出予算配分方針を決定するに際し、新図書館の運営費の増額分に対し、全学的見地に立った予算措置を講じていただくことが決定され、新館が竣工する昭和58年度以降の図書館に対する予算配分の基本方針が確定した。これらのことについては、稿を

改めて語りたいことがある。

昭和59年4月9日、新しい図書館システム、サービス体制の下で図書館は全面開館し、多数の入館者で活みなぎる日々が始まった。「京大の館員の目が輝いている」とは、当時の東京大学図書館長裏田先生から頂戴したお褒めの言葉である。

その後も図書館業務の電算化など、西原館長の下で図書館機能の充実を目指す館全体の取組みが続き、新しい図書館の形が整えられた。林先生・高村先生・西原先生三代の館長の下で全館員が奮闘した図書館づくりは、大学の将来を見越した歴史的な大事業であった。

(まつだ よしひろ：元附属図書館総務課長
現財団法人京都大学後援会事務局長)

新館建築の思い出

金井 孝

「京都大学の長い間の夢の一つが、美しい装いと豊かな機能をそなえた図書館として、いよいよ開館の運びとなりました。まことにご同慶にたえません。読みたい本がほしいと思う時に手に入り、希望の文献が手際よく検索でき、書庫内で自由に拾い読みして思わぬ本や文章と出会い、妨げのない環境で読書と思索にふけり、また分野を越えた学問の交流の場が提供される、大学人のこんな夢を満たせる図書館でありたいとの希いが、新しい図書館には籠められております。」昭和59年3月21日、新図書館の開館記念式における高村仁一先生の式辞はこう始まっている。式辞の草稿は、松田栄博総務課長が熱き想いをこめて作成した。関係者一同がこの図書館に託した理念や施策にはじまり、新館建設にいたる経緯、建物の規模、特色を述べ、各方面に対し謝意を表明する、かなりな長文である。

前日も遅くまで、館長お得意の「夜道に日は暮れず」という科白が聞ける迄、文案を巡って鳩首凝議が続いた。「ご同慶にたえない」は第三者の言葉で、当事者が言うのはおかしいと言

い張った私に、「慶びを同じうするのだから」これでいいのだと応えられた先生のお顔が、今も目に浮かんでいる。起草者の文章を大切にする心配りと、全員でこの慶びを共有したいとのお気持ちが如実に窺われる温容であった。

少し笑みをたたえて、ゆっくりと、昨夜最後の仕上げをした文章と一言一句違わず、句読点までが見えるようにご挨拶が進み、関係者の名を列挙し謝意を述べられる先生の手には、草稿は無かった。様々な数値や固有名詞を含む、長い文章を完全に記憶されるため、昨夜は睡眠時間を削られたに相違なかった。すべてを脳裏におさめて式に臨むという、先生一流の誠意の表現である。図書館の新営に関した全ての人々、式辞中には言及されていない「身内」である職員や、炎天下に汗したアルバイトの学生一人一人を含む全員に対する感謝の表現でもあった。息をつめて、自分たちの夢が、肉声となって、語られるのを聞いた。涙滂沱であった。

15年たった今、改めて読み返して見ると、この式辞には新しい図書館が目指したすべての事